学校法人　藤学園　藤幼稚園　　第 21 号

園長室の窓から

平成 25 年3月1日

過日の生活発表会には、多くの保護者並びにご家族の方々にお越しいただき、温かいご声援を最後まで賜りましたことに対し、厚くお礼を申し上げます。

会場にこもる熱気と大きな声援を受けての中、緊張しつつも、真剣な表情で練習の成果を発揮していた子ども達の姿にとても感動しました。と同時に、個人差はあるものの、子ども達一人一人の成長の凄さに改めて驚嘆したところです。とりわけ、幼児期の１年間の成長は非常に大きく、昨年の４月からの様々な活動や生活体験が、この発表会で大きく花開いてきたように思いました。

春の足音が聞こえる３月となりました

ところで、早いもので、本年度の最後の月となりました。今、どの学年・組もこの一年間の総括を行なうべくまとめの活動に励むとともに、これまでの思い出を形のあるものに残そうと、様々な製作活動に取り組んでいます。

そして、18 日（月）に実施する「卒園式」、22 日（金）に行います終業式など、大切な園行事も続いており、幼稚園全体がゴールを目指して慌ただしく動いています。

そのような中にあって、子ども達には有終の美を飾って、卒園及び進級を迎えてほしいと考えています。ここが正念場、幼稚園として、本年度の残された日々を子ども達が充実したものとしていけるよう、温かく見守っていきたいと考えています。

教育雑感　シリーズ 21

~百匹目の猿現象から~

1953 年（昭和 28）に、宮崎県にある幸（こう）島で、１歳半のメス猿が、イモを川の水で洗い流して食べ始めました。メス猿のこうした行動は若い猿たちにも広がり、やがて猿たちは海水でイモを洗って食べるようになりました。海水の塩分がイモを美味しくしたのか、猿たちのイモ洗いは、淡水から海水へと変わっていきました。

そうしたある日、大分県の高崎山の猿たちの中にも水でイモを洗う猿が現れ、高崎山の猿たちにもイモ洗いの行動は広まっていきました。この猿たちのイモ洗い現象が、遠く離れた宮崎県の幸島から大分県の高崎山へ伝播した現象を、アメリカの科学者ライアン・ワトソン博士が、「百匹目の猿」現象と名づけたのです。

博士は、宮崎県の幸島でサツマイモを洗う猿の姿がある臨界値を超えると、その行動は幸島の猿の群れ全体に広がるだけでなく、遠く離れた他の場所に生息する猿たちの間にも自然に伝わるのではないかと考えたそうです。

そして、その臨界値を便宜的に「百匹目」としました。今では、猿だけでなく、人間を含む哺乳類や鳥類、昆虫にも認められる現象ということであり、なるほどと思わせる考え方だと思いました。

今、いじめや体罰、児童虐待等の問題が社会問題化しており、子ども達を取り巻く状況は、極めて厳しいものがあります。そうした中、全国には、こうした問題に組織としては小さいものの、地域の方々を巻き込んで熱心に取り組んでいる人たちがみえます。

こうした組織で活動をしている人たちのひたむきな思いが強くなり、それぞれの組織のネットワークの広がりが一定基準に達した時、それが「百匹目の猿」現象となり、社会全般に伝播するのではないでしょうか。

こうしてみますと、何をするにしても初めの一歩を踏み出すことが大切であり、後は忍耐強く継続的に取り組むことで、大きな運動に広がっていくのだと思いました。

~シンボル~

「シンボル」という言葉の意味は、象徴、表像とあります。因みに、象徴の意味を調べてみますと、抽象的な思想・観念・事物などを、具体的な事物によって理解しやすい形であらわすこととあります。

こうした意味を踏まえて、少し極論を言えば、幼稚園や学校のシンボルは先生であり、家庭のシンボルは親ということになるのでしょうか。それでは、シンボルである私達大人は、どう子ども達と関わっていけばよいのでしょう。

例えば、銅像は動きもしませんし、喋りもしませんが、それでいて何かを見守ってくれているという存在感があります。私達大人もそうした“存在感”に近づけるよう日々努力し、子ども達の正しい行動を導いていきたいものです。